

**希少植物とどう向き合うか**  
**— 伊那谷の身近な植物ハナノキから考える —**  
**佐伯いく代**

伊那谷の自然 特集テーマ「身近な生き物を守ることは、なぜ大切なのか？」によせて

**身近な希少植物ハナノキ**

私は、希少植物であるハナノキ(写真1)の研究を行っています。ハナノキはカエデの仲間  
で、下伊那をはじめとする中部地方の限られた湿地にのみ生育しています。花や紅葉が美  
しいため、神社や住宅の庭先、街路などに多く植えられています。希少植物とはいっても、下  
伊那の人々にとっては身近な植物の一つなのではないでしょうか。

このハナノキは近年、個体数が急激に減少しています。主な原因は、生育地となる湿地  
が、住宅地、農用地、人工林、ゴルフ場などとして開発されてしまったからです。そのため、環  
境省のレッドデータブックでは絶滅危惧種に指定されています。

**ハナノキとどう向き合うか**

ハナノキを保全すべく、下伊那では「はなのき友の会」というグループが保全活動を行っ  
ています。私もこの活動に参加させていただいていますが、ハナノキをはじめとする希少植物とど  
う向き合うべきか、考えさせられることが多かったです。以下に簡単ですが、活動を通じて感じ  
たことを紹介させていただきます。

**(1) 自生地をまもることの重要性**

希少植物の保全で最も重要なのは、今ある自生地を守ることです。植物が自生している  
ということは、そこに、その植物が生育できる環境や歴史があったことの証(あかし)です。ハナ  
ノキについても、ハナノキが生育できるような特殊な湿地(写真2)があったからこそ、下伊那  
に自生しているわけです。自生地を守るためには、必要のない開発は行わない、というのはも  
ちろんのこと、どうしても開発が必要な場合でも、計画段階から事業主と連絡をとり、自生  
地を開発対象からはずすなどの配慮が必要です。野生のハナノキは、標高が低く地形のゆ  
るやかな湿地に生育しています。このような場所は、人間にとっても使い勝手が良いために開  
発が進んでしまいました。今ある自生地は、こういった開発を奇跡的に逃れた生き残りであり、  
確実に保全することが大切です。

開発対象地に希少植物が生育していた場合、その植物を別の場所に移して開発を行  
うことがあります。この行為はしばしば「希少植物に配慮した工事」といわれたりもしますが、  
私はこれを保全と呼ぶことに抵抗を感じています。植物にはそれぞれ生育に適した場所があ  
り、移植した場所が必ずしも適地であるとは限りません。(移植したが結局枯れてしまったとい

う例は多く報告されています。)また、たとえ元気に生育したとしても、その植物がもともと生育していた環境や、自生地に存在した自然の営みを一緒に保全することはできません。従って、「移植すれば保全したことになる」という考えは厳に慎むべきだと思います。また、数を増やすためにところかまわず植栽するというのも考え物です。絶滅危惧種の個体数を回復させることは重要ですが、例えば、適地でない場所に、もともと生えている植物をとりぞいて植えるのは行き過ぎです。一般に、生育地を復元・創出するには、科学的にわからないことが多く、経験を積み重ねて慎重に行う必要があります。希少植物のためと行って行った活動が、思わぬ結果をもたらさないよう気をつけなければなりません。

## (2) 問われる自生地の保全のあり方

自生地を保全することが大切だと書きましたが、保全対象となっている植物に注目するあまり、他の植物を除去し、公園のように整備する手法については見直しが必要だと思います。ハナノキでもこのような例がいくつかの自生地、特に岐阜県内の天然記念物でみられました。これは、市民がハナノキにアクセスしやすくなるという利点がある一方で、自生地の環境を大きく変えてしまうという問題点があります。公園的な管理を行っている自生地で植生の調査を行ったところ、光環境が変わってササの密度が増加したり、帰化植物が侵入したりする危険性があることがわかりました。ハナノキの生育地にはハナノキの他に、希少種を含む多くの野生植物(写真 3)が生育しています。また、場所によっては、ギフチョウの食草であるヒメカンアオイなども生育していますから、林床にササや帰化植物が繁茂すると、湿地の生物多様性が減少してしまうおそれがあります。

## (3) 目指すべき方向

ハナノキの保全活動を通じて、「ハナノキさえあればよい」、とか、「とにかく植えて数が増えればよい」、というのではなく、自生地の環境そのもの、そして、その他の生き物に配慮して保全をすすめる姿勢が大切だということを学びました。この視点は、北米では「エコシステムアプローチ」と呼ばれているそうです。エコシステムアプローチは、ある特定の生き物だけを保全しようとするのではなく、それを支える生態系全体(=エコシステム)を保全しようとする取り組みです。私も、美しい湿地と、ともに生きる動植物があってこそそのハナノキだ、という気持ちを忘れず、保全活動を続けていきたいと思っています。

<写真>



写真1: ハナノキ.



写真 2: ハナノキが自生する湿地. ハナノキは低湿地とよばれる特殊な湿地に生育する.



写真 3: ハナノキの自生地其林床植物. ハナノキの生育地は林床の植物相が豊かなことで知られる.

\* 2006 年「伊那谷の自然」に掲載された文章を一部改編しました。